
CHICKEN

明日風キザシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C H I C K E N

【Nコード】

N 0 8 8 1 U

【作者名】

明日風キザシ

【あらすじ】

エッセイ的私小説。ダメダメだった今までを面白おかしく(?)、そしてシリアス(?)に綴ったものである。

※これは事実を元に再構成したフィクションです。

0章 プロローグ

北海道札幌市。日本最北の政令指定都市。そんな場所とは大違いの東区丘珠。市街地からは離れてしまいが名前自体は有名かもしれない。存続が危ぶまれてはいるが札幌市内唯一の空港、「丘珠空港」がある（厳密には丘珠ではなく栄町になる）。さらに、『玉ねぎ』の生産量が札幌市内一らしい。周りには玉ねぎ畑が横たわる。そんな中に学校や消防署などがぼつりぼつりと並ぶ。そして玉ねぎ畑を横目に鉄工団地があり、さらには住宅街まである。農業区域なのか工業区域なのか住宅区域なのか分からない。そんな場所はとてもじゃないが政令指定都市の中とは思えないかもしれない。札幌という政令指定都市の中の田舎。そんな場所で僕は生まれ育った。

そんな片田舎で、僕は、どこでも、誰でも、あるだろう、と思われるそうだが、僕は小学校6年間と中学校3年間の9年間、いじめられ続けた。逆にいじめたこともある・・・しかしかなりの短期間であった、1週間とか2週間で終わった。僕もそういう意味では同罪なのだろう。僕もそう思う。

僕は不登校にはならなかった、不登校は必ず阻止された。そういうのが原因なのだろうか、ネガティブな性格になってしまった。インドア派だった。小学校の時（特に小学校3年生頃から）は家に帰れずすぐにPS2やゲームキューブの電源を入れ、ゲームばかりやっていたように思う。マリオカート、鉄拳（シリーズ全て）、リッジレーサーV、ファイナルファンタジー（?、?、?）、…と名作ゲームはかなりやりこんだ。余談だが、小学校の頃はファイナルファンタジーは面白いと感じなかった。面白いと感じるようになったのは中学生になってからだったように思う。とりあえず、ゲームばかりやっていた。

アイデンティティを固持することができない。

僕はネガティブな性格なものだから、考えたくなくとも悪い方向に考えてしまう。日本語では『言霊』と言って、「言葉で言ったことは存在する」と古来から考えられている。僕は『言霊』と言う言葉は、日本人としてのソウル（韓国の首都ではない）を持っている限りは、切っても離せないものだろうと思うし、大切にしていかなければならないことだと思う。日本人のDNAに深く刻まれたものなのだろう。話がそれてしまったような気もするが、そうやって悪い方向に考えてしまったことを口に出してしまったりする。余計なことをペラペラ喋る。そういう性格だった。天の邪鬼だったりもする。

それを踏まえて、僕は“何者”なのかを考えてみようと思う。

小学校の時は“頭がいい”とか“すごい”とチャホヤされていた。でもハッキリ言って僕は特別頭が良い訳ではない。いたって普通だ。もしかしたら普通以下かもしれない。そんなものだった。

小学校高学年になってからは幾度か「学級代表」を任されることもあった。信頼なのか冷やかしのかは分からない。

僕はすごい人ではない。それなのにチャホヤされていたと言うのは驚くべきことだろう。昔の自分ならそうは思わないが、今はそう思う。チャホヤされていたために“驕った”性格になってしまった。

「俺は他とは違う。」

「連中とは違う。」

今でもその“驕った自分”が登場する。登場する時はいつでも周りからの何らかの圧力があつた時だ。罵声、暴力：そんな時にどこか“驕った自分”が登場する。僕は札幌市内とは思えないような雄大な玉ねぎ畑で囲まれた片田舎で、“驕った人間”になってしまった。中学校になってからは、1年生から3年生の前期まで、学級委員や生徒会の一員だった。1年生の前期は“学級代表”。1年生の後期から3年生の前期までは“生徒会役員”だった。訳も分からないまま、気が付くと僕の名札のフェルト製の台布には、“代表”とか生

徒会役員用の花の形をしたバッチが付けられていた。

僕は生徒会をやりたくてやっていた：というのは建前だ。他の人から見れば自分から志願したのだから、やりたくてやったのだろうと思われるだろう。確かに最初はそうだった。1年生の後期から始まる生徒会へは、元々そういうのをやってみたいという気持ちがあったため、生徒会役員の選挙に立候補した。ヤル気満々だった。しかし僕は2年生の後期からの任期はどうしようかと悩んでいた。すぐに立候補は決めた。僕以外にやる人はいない。だからそれは執拗に迫られているような状態だったように思う。だから実際、やる気はなかった。本当に「先輩すいません」という感じた。

僕は、建前を振りかざし、天の邪鬼で、驕った片田舎のクソガキなのだ。田舎者なのだから片田舎という域を出ることはない。

この私小説はそんな僕の今までを書いたものであるが、人間の記憶は曖昧だ。だから自分に都合のいいように書かれていたりするかもしれないがそれは仕方ない。

1章 癒えない瑕

僕は小学校6年間と中学校3年間の9年間、いじめられ続けた。今から9年前と言えば、2002年、ソルトレイクシティオリンピック（冬季）、日韓共催のサッカーW杯が行われ、プロレス界ではボブ・サップが数々の強敵を蹴散らし「怪獣」と呼ばれていた頃。札幌市内で建具店を営んでいた親父は買ったばかりで使い慣れないソニーのハンディカム（今でも現役）を手にし、僕は慣れないスーツ姿（もちろん今でも慣れない）で当時新築されたばかりの小学校へ当時の親父の愛車だったトヨタのハイエースで向かった。車高の高いハイエースにまだ小さかった僕は乗りづらかったが、その開放感のあるフロントガラスから望む景色は壮観だった。小学校へはものの1、2分で到着する。僕の家は小学校から近いところだった。僕は他の人とは幼稚園が違ったため（幼稚園も病弱だったため1年しか行っていない）、知っている顔は無かった。ただ他の人々からは「あ！同じクラスだ！！！」

と言った会話が聞こえてくる。僕はどうすればよいか分からない。周りからは僕は到底できるはずの無い会話がこだまする。そんな中で僕は一人ぼっちだったように思う。そこでまず心に瑕が付いてしまった。

「僕には友達がない」

子供だからそう思うのも仕方ない。しかし実際、9年たった今（2011年）でも小学校から持ち上がってきてずっと同じ学校にいる連中の中に友達と言える人は少ない。学年に90人余りいるが、その中では片手で終わるくらいだ。連中から離れていった。僕は別格の存在に見えたのだろうか。僕ははっきり言って大したことない微妙なヤツだ。

小学校に入学して1ヶ月か2ヶ月くらいたった頃だったのだろうか。僕は生まれて人生で初めていじめられることとなる。いや、この場

合はいじめではなく、単なるじゃれあいのようなものだろう。しかし当時の僕は深い瑕を負ってしまった。

教科書やノート、筆箱を隠され、暴力を振るわれたのだった。同じようなノリで9年も続いている。学校へ向かう足取りが重くなる。小学校1年生と言えば『学校に行くのが楽しみで仕方ない』と言う気持ちでいるのがステータス、と言うイメージがある。僕もそう思うのだが、当時の僕は『学校はつまらない』と思っていた。小学校1年生の思うようなことではないだろう。しかし小学校1年生の時のいじめは割りとすぐに解決し、それから2年生が終わるまで、楽しい生活を送っていた。

だが、2004年、僕が小学校3年生に上がった時、事態は急変した。小学校3年といえば、多分どこの学校でも学級編成：つまり『クラス替え』が行われる。僕の通っていた小学校は各学年2学級しかない小規模な学校だった。僕は1年と2年の時は1組だったが、その当時2組だった連中との面識はほとんど無かった。その当時2組だった連中も学級編成ではごちゃ混ぜになる。だから僕はクラス替えが楽しみで楽しみで仕方なかった。

しかしそれは、わずか数日にして脆くも崩れてしまうこととなる。

そこから永きに渡るいじめが続くこととなったのだ。

最初は単なるじゃれあいから始まった。Y田という奴がいてそいつが僕に常にちょっかいをかけてくる。僕はイライラする。当時の担任はS谷という“アラフォー”の女教師だった。今で言えば“メタボ”な教師だった。その教師は傷だらけのスバルのプレオに乗っていた。余談だが、その教師は2009年夏に“糖尿病”になり入院したらしい（出典は元友人N島の弟）。それはさて置きその教師はやる気がないのか諦めていたのか面倒だと思っていたのか分からないが、叱り戒めているという建前を振りかざし、周りからは確かにそう思われていたかもしれない。だが、結局効果は無い。それでズルズルと引きずり、結果的には現在も連中は変わらない。中途半端

なのは良くないというのが証明されたのだ。

当時僕をいじめていた連中は一人を除いては中学の今でも（公開時は中学ではない）同じ学校に在籍する。その一人と言うのはボス格だった。F幡という奴で彼とは小学校6年間同じクラスだった。彼のせいで小学校6年間（厳密には5年間）、学校への足取りが重くなる原因だった、と言っても過言ではない。傷つくだけ傷ついた。

僕は繊細すぎたものだから、心は折れる。しかし、担任や親など周りの大人に言うと言う選択肢はあったのだが、選ぶことは無かった。自尊心が許さなかったのだ。プライドが高すぎる。プライドが高すぎるくせして心が繊細だった。逆に他人のプライドを傷つけるようなこともあったかもしれない。そんな人間だったのだ。僕に何か嫉妬していたのかもしれないが、僕なんかは大したことない田舎のクソガキだ。しかし連中はもっとクソガキだ。札幌の中の田舎で僕は驕り高ぶりプライドの高すぎる繊細な小学校時代を過ごし、少なくとも今の僕にとって大きく足を引っ張ることとなる。

「連中とは違う」

「俺は凄い」

運が良かったのか、周りのレベルが低かったのか分からないが、学校ではチャホヤされ、職員室では評判の優等生、それ故の嫉妬から来るいじめ。僕はこの三つの狭間の中で、暗くネガティブな思考になってしまったのかもしれない。小学校3年、それは僕にとって大きな試練が待ち受ける大きな関門だったのかもしれない。

2章 幻の優等生

僕は職員室では評判の優等生だったのだろう。先生から褒められることは多かった。小学校6年間。それ故に嫉妬され、いじめられ続けていた。罵声と暴力。それが小学校6年間と中学校3年間の9年間。実際は小学校の1、2年の時は微妙だったから小学校3年生から中学校3年生までの7年間、壮絶ないじめがあった。…と書くの大げさかもしれない。今ならばどこでもあることだ。

僕はストレス発散だったのだろうか、ゲームばかりする子供だった。勉強は宿題が出ればやるという感じだった。公文やソロバンもやっていたからその宿題は一応やっていた。公文は小学校2年から小学校6年までの4年間通っていた。英語。僕が英語が得意な理由は公文である。公文で苦悶した（おもしろくない）から、英語だけは出来る。事実、小学校3年生の時には英検5級、小学校5年の時には英検4級を取った。ソロバンは3級までやった。しかし今ではソロバンでの計算方法は覚えていない。

まあとりあえず、そういう風に習い事はたくさんやっていた。一期カラテ教室（S道会館）に通わされたこともあったが、暴力的なことが苦手だった僕には合わなかった。とりあえず僕はいろいろなことをやっていた。

一応色々やってはいたが、実力は伴わなかったように思う。小学校3年のときに英検5級、小学校5年の時に英検4級を取ったが、自分が書いている英文は何を意味しているのかは全然良く分からなかった。

それもそうだろう。“幻の”優等生だからだ。実際は違う。ゲームばかりしていて目も悪くなる。小学校5年の時には自宅にインターネットの環境が整ったため、後々問題が起ることとなるのだが、インターネットに没頭した。

そんな人間のどこが優等生なのだろうか。

パツと見はイケメンではない。イケメンだったら苦労することは無いだろう。短く切りそろえた角刈り頭、太い眉毛、フチ無しメガネ。見た目は優等生に見えるのかもしれない。しかし僕は優等生とはかけ離れている。かといって劣等生でもない。普通なのだ。普通であるのにヒーローに祭り上げられた。確かに僕は他と同じでありたくないと思うこともある。天の邪鬼な性格がそうさせるのかもしれない。

そこで僕はいつの間にか「建前を振りかざす」ようになってしまった。心にも無いことをあること無いことペラペラ喋る。これも後々問題が起ることとなる。

問題が多い小学校時代だった。僕自身にも周りの連中にも。

3章 逆転

2007年夏、僕は小学校6年生だった。小学校最後の1年間も、やはり罵声と暴力が付きまとった。

小学校6年生。メガネデビューだった。最初は青いチタンフレームのメガネ。短パンを穿かなくなった。クルマに興味を持つようになった。

そんな中でも相変わらずいじめは続いていた。

連中は成長していなかったのだろうか。僕は自分自身で考えてみれば精神年齢は実年齢よりずっと低いように思う。連中もそうだろう。精神年齢の低いものどうしだから解決へは一向に向かわない。

小学校5、6年の時の担任はH士先生という先生で、休日はいつも競馬場やウインズへ行っていると言っていた。紫色のホンダのオデッセイを乗り回すひとりものの“アラフォー”の先生だった。その先生はいじめ問題は真剣に考えていたようだった。

そんな中、夏休みを迎えた。夏休みに入ればPC三昧の日々だった。インターネットに入り浸った。そんな時、僕はあるひとつのブログを見つけた。

それは僕をいじめていた連中の一人、H本のブログだった。なぜ分かったかと言うと、“顔出し”をしていたからだ。

僕は変な気を起こした。そのブログに書き込みをした。一人だけではない。友人だったN村と一緒にだった。その後数年間に渡って、N村との仲は微妙になることとなる。

“ネットいじめ”だった。僕がそうされたのと同じように罵声を書き込んだ。ただ、リアルなのかバーチャルなのかと言う違いだけだった。しかし内容は同じだった。

ただやっぱりネットいじめなので、解決は早い。IPアドレスをすぐに調べれば犯人は分かる。当時の自分はインターネットを使える

だけで、そういうところの知識に欠けていた。いや、そういう発想に至る時点で人間としてあってはいけない。

2007年9月5日水曜日。音楽の授業だったと記憶している。音楽室での授業。そのとき総務のK岡先生という先生に

「明日風くん、ちょっと来なさい。」

と呼ば出された。当時の自分はバレバレな癖に絶対バレないだろうとか、別になんとも無いだろうという根拠の無い自信があった。だから呼び出されたときは、

「？」

という感じだった。頭の中に沢山の

「？」

が浮かんだ。

しかし後ろを振り向くと、共犯だったN村の姿が見えた。ヤバいのかも知れない。根拠の無い自信は脆くも崩れ去ることとなった。

K岡先生は僕を別室に連れて行き、こう言った。

「8月25日のことです。」

2007年8月25日。その日も僕とN村はN村の家のWiiからそのブログに書き込みをしていた。しかしその事はすぐには思い出せなかった。その場には僕とN村の他にY田（ちょっかいをかけてくる例のいじめっ子）とK村（愛称…ニンジン）がいた。（こう書くとなぜか苗字に村がつく奴が多いように思えるのは気のせいだろうか）

「君は、N村君の家のWiiからインターネットを使っていましたね？何をみましたか？」

やっぱりヤバかったんだ。自分には焦りしかなかった。

しかし僕は何とか言い逃れしようとした。下劣な人間だ。

「ゲームとかの動画を見ました。」

実際にそうだったし、言い逃れたつもりだった。しかし

「そして？」

と、聞かれた。

そのとき自分は本気で全力で本当のことを言わなければいけないとお告げがあったように思った。しかし、口は堅かった。プライドも高すぎた。ここですべてを話すのは自尊心が許さない。と、とっさに思った。

だが、自分はやらかした人間だ。下劣な人間だ。だから遠まわしな感じで話した。

「…」

数秒間沈黙が続いた。

「

「

」

」

結局、僕は下劣な人間だ。相手の家に謝りに行った。自分も確かに悪かった。今では深く反省してはいるのだが、向こうはどう思っているのだろうか。向こうが何とも無かったら僕だって何とも無かった。

『やった方はすぐに忘れても、やられた方はずっと覚えている。』
そう思いながらも、僕は今でも反省している。

警察の捜査が入ったようだが、指紋を取られることも無ければ、社会的制裁も無かった。しかし僕の心には自分でつけたものだが大きな傷が残ってしまった。

4章 草むらのヒーロー

草むらのヒーローというのは、すでに廃車（もしくは未だ廃車にな
っておらずナンバーの付いた状態だが自走不能状態）になりながら
もずっと私有地と思われる“草むら”に放置されている“過去の名
車”のことである。実際、僕の家近所には僕が小さいころから今
までの10年以上放置されている「R32スカイラインクーペ」が
放置されていたりする。

中学校に上がる直前の春休みのことだったと思う。

僕は自転車で“TAXi”しながら丘珠を突っ走っていた。（そ
こまでスピードは出ないし、そんな運転技術も無い）

丘珠のはずれ、鉄工団地の果てで出逢った。

朱色の古いトヨタのハイエース。錆びだらけだった。ナンバーは外
され、すでに廃車になっているようだった。

場所も場所だった。丘珠の町のはずれ、周りには畑が広がり、奥に
は工場が見える。私有地と思われる場所ではあったが、道路に面し
た場所に放置されていた。

それ以来僕はことあるごとにそのハイエースを見に：いや、逢いに
行っていたと言うほうが正しいのかもしれない。僕の想像の域を出
ないが、彼は何も言わないが、僕に何かを伝えようとしているよう
に思えた。当時の僕は分からなかったが、今思えば、何らかの形で
僕を励まそうとしてくれていたのかもしれない。いや、絶対にそん
なことはありえない。しかし、今でも僕はそう思っている。単なる
妄想だ。

今となつてはその朱色のハイエースは撤去されてしまったが、当時の僕はそのハイエースの姿に自分を映し出していたのかもしれない。自分のことなのに詳しく分からないのか、と言われそうだが、当時の僕はいろいろな意味で病んでいた。H本のブログを荒らした事件から半年の月日が流れていたが、そのとき負った傷は半年経った当時でもまだ疼いていたように思う。

友人も少なかった。今もだが。

そんな中で出逢った“草むらのヒーロー”だった。彼は草むらのヒーローでは終わらないだろう。僕にとっても、“ヒーロー”なのだ。

5章 慕情

“慕情”と言うのは「（異性を）したわしく（＝心がひかれて、そばに近づきたくなる気持ちである。恋しい。したわしい（スーパー大辞林3・0より））と思う気持ち（スーパー大辞林3・0より）」と言う意味を持つ。

何を言いたいかというと、初恋だった。中学校に上がってすぐのことだった。しかし僕はネガティブな人間なものだから、どうせ無理だとか、ダメだとか、それ以来3年間ずっと思い続けていたが、同時に3年間ずっと気になる存在でもあった。

ボキャブラリーが少なくせして、“慕情”と言う言葉を知っているのもおかしいようだが、僕は本当にずっとそのような気持ちに苛まれるのだ。

他にも結構こういう話はあるだろうが、僕の場合は進展することも後退することも無い。そのままなのだ。そのままずるずる3年間も引きずっていた。結局行動を起こさなかった。起こせなかったのだ。僕はコンプレックスがありすぎる。微妙にかすれたような声、分厚いメガネ、角刈りと間違われる髪型、デカイ顔、細い目、体系、短い脚：そして、ネガティブで、天邪鬼で、それでいて常に樂觀的な性格。挙げ出せばキリが無い。自分に自信が持てないし、アイデンティティを固持することもできない。そんなヤツが恋愛に関して何らかの行動が起こせるだろうか。僕は無理だった。

その彼女のほうは僕をどう思っていたのだろうか。たぶん僕ことは眼中にあったとしても、恋愛対象ではなかっただろう。ただ、とりあえず、僕のことをどう思っていたかは聞いてみなければ分からない、僕にとっては永遠の謎だ。聞こうとする気になれない：なぜなら、行動を起こすことすらずっとできなかった。男女問わず話しかけるのが苦手なのだ。他人の目には普通に映るのかもしれないが、苦手で苦手で仕方ない。だから気心知れた一部の仲間以外と話すこ

とは少ない。

：しかし、彼女の方から僕に話しかけてくることは何度かあった。僕は必要なとき若しくは話しかけられない限りは話すことは無い。でも、こんなことがあった。修学旅行から帰ってきた日、札幌駅北口前広場で解散だった。僕はその後親父が当時の愛車ヴィヴィオで迎えに来ることになっていた。解散後、僕は親父と北口前広場で合流し、ヴィヴィオを停めている駐車場へと向かっていると、後ろから僕の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「明日風★」

僕は振り向くとそれはその彼女だったのだ。赤い軽自動車の後部座席の窓から僕を呼んでいた。僕はどう反応すればよいか良く分からなかった。

その後、家に向かう車の中で親父に、「彼女か？」と問い質されたのは言うまでもない。

僕の好きな曲に、マイケル・ジャクソンの「Human Nature」という曲がある。その曲の一節に次のような歌詞がある。

「See That Girl (あの娘をご覧よ) She Knows I'm Watching (僕が見つめているのを知っている) She Likes The Way I Stare (この視線がお気に召したようだ)」

そしてもう一曲。巡音ルカの「トエト」と言う曲。この曲を僕が初めて聴いたとき、感動した。この曲の一節に次のような歌詞がある。「ほんとの気持ちを伝えたいけど もじもじトエトがそれを拒む ここぞと言う時 いざと言う時 えっとえっと、あのえっと、アノエツトエト」

そして入試前日。3月2日に登校した日の朝、僕はその彼女に、

「明日風、明日頑張ってネ★」

と言われ、また僕は反応に困ってしまった。だがこれは僕が都合の
ように受け取りすぎているのかもしれない。だが真相は絶対に分か
らない。

もじもじトエトがホントの気持ちを拒む、アノエツトエト……。初夏
の札幌駅北口、そして初春の学校の玄関。僕の心の中にも確かにト
エトがいた。

6章 ボムへい

ボムへいというのはマリオで登場してくる爆弾のやつだ。キャラ自体は知っていても名前を知っているという人は少ないかもしれない。触れたら爆発するアレだ。僕はそれほど追い詰められたことが幾度かある。

小学校3、4年生の頃、小学校6年生の頃、そして中学校に入学し、1年の頃と3年の頃・・・

当時僕は何を考えていたかというところ、今となっては珍しいものではなくなった「いじめ自殺」であった。本気で実行しようと考えていたことがあった。

だが僕はチキン野郎だから、実行できなかったし、テレビやゲームなど、誘惑があり「○○やったらタヒろう」と考えていた。その誘惑があったからこそ実行できなかった。「○○やったら」というのが次から次へと出てくる。だから先延ばしになった。結果的にはそれが良かったのだろう。だろう、ではなく良かった。良かったのだ。だからこそ爆発せずに済んだ。中学校3年の頃は、「ニコ生」と「ツイッター」と「ブログ」のおかげでタヒらなかった。逆に、いろいろと励ましてくれたりなどしてくれた。リアルではほとんど無いことだった。

リアルでも友人は少なかったが、いた。そういう友人もいたからこそ、僕はここにいるのだと思う。

正月になって、年賀状は出す。でもここ数年は片手チョイで終わる程度しか買わないし、書かない。僕から送った連中からは何も言わなくてもちゃんと元旦に送られてくる。小学生のときはクラス全員に出す、と言う無謀な挑戦をしたが、もうそういうつもりにはならない。

そんな友人とは中3になってからは、自転車で札幌市内を走り歩くようになった。自転車と言うアイテム、数えれば片手で終わる程度

の少しの友人。僕はインターネットを使っているときと、自転車で風を感じながら突っ走っているときこそが、羽を伸ばせるホームポジションなのだ。ホームポジションということは、素のままの自分、
LET IT BE。

LET IT BE：（和訳）そのままにしておきなさい　―なすがままに

ビートルズの名曲だ。

僕も『カチッ』となったときはヘタに抑えるのではなく、“LET IT BE”：そのままにしておく。自分のことなのにそのままにしておくというのもおかしい。でも、僕の場合はリミッターがかかる。車の場合はほとんどの車種では時速180キロでリミッターがかかる。でも僕の場合、車に例えれば時速80キロで、いや、それ以下かもしれない、と言うぐらいリミッターがかかってしまう。要は単なるチキン野郎だ。時速80キロも出さないでリミッターがかかる様なものだから、小心者で肝っ玉が小さい、それ以外は考えられない。だから“LET IT BE”で良いのだ。

ちなみに僕自身は車はスピードが出れば出るほど良いと思っている。でも事故が起らない範囲内で。

7章 Mitsubishi

僕が得意な教科は英語。多分簡単な日常会話程度であれば何とか大丈夫だろう。一応、“英検3級”と言うのが、それを物語っている。ただ、英検3級を受けるときは、特に二次試験の面接の前、僕はまたかなり驕り高ぶっていた。

「まあ、大丈夫だろう。」「こんなもんだ。」「余裕だ。」

面接の前に、ろくに練習もせず、そんなことを思っていた。

「俺は英語が得意だ」

ずっとそういう風に思っていた。実際成績で言えば三年間5か4以外はついたことがない（ただし英語に限る）。だから、そういう風に思わせる、材料となったのかもしれない。

そして、とうとう面接の日を迎えてしまった。ろくに練習はしていない。僕は制服姿で試験会場の北区北29西2、国道5号創成川通、「札幌陸運輸支局」の向かいにある、札幌S成高校へ向かった。

建物に入り、受付を済ませる。控え室に入るのだが、それは教室として使われている部屋のようなだった。周りでは会話がこだましている。面接を目前に控えて、余裕がありすぎると思ったのは僕だけだろうか。

そんな中、僕の前の席に座っているやつと僕の左に座っているやつが話をしていた。その会話の中で「？」と思う節があった。

前「俺の「?」?」（聞き取れなかった）のやついるじゃん、こいつ3年だwww

左「マジで?!」「?」?」（個人名と思われる）みたいだなwww
前「なんか、害見みたいだなw」

僕のことについて話しているのだろうか、いや、そうじゃないかも

しれない。「???」の部分「後ろ」なら僕のことだ。聞き取れなかったが。でも僕が3年で英検3級を受けようとしているのは確かだ。多分あの2人は中学1年か2年なのだろう。連中にしてみれば1、2年で英検3級がステータスなのだろうが、英検3級は「中学卒業程度」と言う基準があるらしい。ちなみに5級は中学1年程度、4級は中学2年程度だそうだ。と言うことは昔の僕は小学校3年で5級、小学校5年で4級を受け、合格している。僕はどこかで道を間違えたから、今のように普通な奴になったのだろう。もしかしたら、天才、とまでは行かなくても結構すごい奴になっていたかもしれない。だから、というわけではないが、僕は害児ではないだろう。一般的に、中3ならば英検3級がステータスである。まあ個人的な解釈や基準もあるかもしれないが、それを押し付けないで頂きたいところだった。しかし、耳に入ってきたそんな会話が、僕にプレッシャーをかけることとなる。

僕の面接の順番が回ってくる。いくつか、いや、かなりの数の部屋を使って面接は行われていた。僕のときの面接官は日本人のメガネをかけた中年の男だった。

英検の面接試験は、まず自己紹介をして、その後プリントを渡され、20秒間黙読する。そのプリントに印刷されている絵や、英文の内容から3問の質問をされる。そして、自分についての質問が2問。趣味などについての質問だ。もちろんすべて英語だし、「Could you speak more slowly? (もっとゆっくり話してもらえますか?)」といった要望には答えてくれない。さらに「Pardon me? (もう一度言って下さい)」と何度も言っていると、減点の対象になるらしい。

まず、部屋に入るところから、面接の一環である、ノックをして「May I come in? (失礼します)」と言いながらドアを開け、面接官にイスに座るよう促された。そして自己紹介。

面接官は「My name is 「???」」(覚えていない)・

Nice to meet you.」と自己紹介をした

僕も「My name is Kizashi Asukaze.

Nice to meet you too.」とシナリオ通りの挨拶をした。

そこで僕は面接官に「OK. I see Mr. Asukaze」とミスターをつけて呼ばれた。要は「明日風氏」と呼ぶようなものだと思う。個人的に、ミスターと呼ぶにふさわしいのは鈴井貴之氏と長嶋茂雄氏だ。それはいいとして、僕は不相応な呼び方をされ、緊張感は一気に高まった。

何問かの質問に答えていく中で、僕は最後の1つの問題で、答えるのに詰まってしまった。そんな中で頭の中では「こいつ3年だ」と言うあの会話が再生される。それで僕は少し混乱し、もっと何を答えたらよいか分からなくなってしまった。

結局何とか答え、部屋を出ると教室の前にいた受付のスーツ姿の綺麗な感じのお姉さんに「お疲れ様でした」と言われたが、単なる自動応答のように思えた。

その後、エントランスで私服姿だった同級生の女子2人とバッタリ会い(5. で書いた彼女ではない、ちなみに5. で書いた彼女も英検3級を受け面接試験も受けていたらしい)、ちょっと話してから、僕はS成高校の建物を出た。初冬の創成川通、風が強く、雪がちらついていた。僕の心情を体現するようだった。僕は北34条駅のバスターミナルまで歩いた。11月中旬、本州ならまだ秋なのだろうが、北海道ではもう初冬だ。冬の風が顔を直撃する。北34条駅バスターミナルへ向かった。やがてバスが来て、バスに乗り込むと、メガネのレンズが一気に曇った。陣取ったのは一番後ろから2番目の左側の席。見慣れたはずの新道沿いの景色を見ながら、やばいんじゃないか、と言う不安に苛まれた。東15丁目・屯田通を越え、だんだん丘珠が近づく。東15丁目通を過ぎると僕の中ではもう丘珠だ。バスは新道をそのまま直進し、苗穂丘珠通との交差点で左折

する。丘珠空港通を越えれば、いきなり田舎になる。道路の両サイドには畑が横たわる。新道や創成川通とはまったく違う光景だ。その後数分で僕の家之最寄りのバス停で降り、5分ほど歩く。雪はやんでいたが、風は冷たかった。

その2週間ほど後、英検の合格証明書が学校で渡され、ひとまずホッとした。

ちなみにタイトルの「Mitsubishi」と言うのは、学校に来たALT（外国語指導助手 Assistant Language Teacherの略）のS先生に名付けられたニックネームが「Mitsubishi」だったからだ。どちらも英語が関係している。

8章 焦点

僕は中3になってから、ずっと焦っていたように思う。特に、10月の学力B版で微妙な点数を取ってからはもっと焦っていたように思う。学力C版、そして英検の面接試験、札幌市奨学生の面接、最終的には入試。プレッシャーが次から次へとのかかる。まるで僕が壁で、そのプレッシャー共がよしかかるかのように。

とにかく僕はずっと焦っていた。そしてそれに追い討ちをかけるかのように、事件が連続した。

自転車後輪ホイールに追突され変形したり、自宅に花火や爆竹を投げつけられたり、PSPのメモリースティックを盗まれたり…と、事件は連続して起こった。

まさに「事件は会議室で起こってるんじゃない、現場で起こってるんだ!」と言った状況だ。

学校ではそれまでに無かったようなことも起こった。俺は関係ない、ではない。その学校にいる時点で関係があるのだ。

勉強に関しても、焦りが出ていた。その焦りは学力テストの点に露骨に表れていた。ABCと回を重ねるごとにだんだん合計点が下がっていったのだった。普通はABCと回を重ねるごとに上がるものらしい。僕はプレッシャーに弱いのだろう。しかし定期テストはそこまで悪くならなかった。それが唯一の救いとなる。本番には強いのかもしれない。

そんな風に、僕の焦りは焦るのだが、それは焦点となり、功を奏することになる。と言うことがあった。英検の面接だってそうだった。

しかし「焦点」と言うのは凸レンズによって屈折した光が集まる点。紙を燃やすこともある。燃やすこともあったかもしれない。

たとえば、僕は何かが起こったときのリアクションが大きすぎるらしい。それが紙を燃え上がらせるようなことになった。まあただ単に連中の思い込みによって起こったことだが。何があろうとも連中

は自分の非を認めようとはしない。そうして起こったのが、乱闘だった。引っ掛けてきたのは向こうからだ。蹴ってきたりする、なぜかを後から聞いてみれば、一般的な考えで言えばどうでもいいようなことでキレているようだ。そしてそのまま取っ組み合いの喧嘩にまで発展した。

血の気が多くなったのかもしれない。

昔から、リミッターがかかる域が狭すぎる。そういう意味で僕も何か吹っ切れたものがあるのかもしれない。

燃え上がってしまったのだった。

9章 聴牌

自分の趣味は麻雀だ。友人でも麻雀のルールを分かっているやつは5人ぐらいいる。だから設備と時間さえあれば卓を囲むことはできる。

それはどうでもいいのだが、『聴牌』（テンパイ）は、「あと1枚で上がれる状態」：要はリーチの状態である。自分は特に麻雀が強いというわけではなく、基本的には面前の役しか作らない。ポンやチー、カンはしない。

さらっと説明したところで、自分を麻雀に喩えてみようと思った。小学校6年間、中学校3年間はずっと振聴（㍡フリテン）上がれる状態だったのにその牌を切ってしまった状態）だったように思う。

『麻雀良く分かんねえよ!!』という人のために野球にも喩えてみる（逆に自分は野球のほうがよく分らない）。野球であれば空振りである。空振り三振、ファウル：その辺になると思われる。空振り続き、もうアウトになっているのだろうが、自分では気づかない。そういう状況だったように思う。三振どころか百振ぐらいしているのかもしれない。

しかし、高校入試においては聴牌になったように思えた。

なぜなら8月の時点で第一志望校合格率は43%。他人であれば「やめたやめた!!」となるのだろう。しかし11月には74%、そして1月には93%と、二次関数のグラフのように合格率は上がっていったのだった。

さらに、出願状況が発表され、僕はこれは聴牌以外の何者でもないと思った。倍率が1.1倍という状況となったのだった。（だが、最終倍率は1.2倍になっていた、念のため。）

『リーチ!』

しかし警戒心がやたら強くなったように思う。それはクラスでの席が原因だったように思う。後ろにはいじめっ子Y田。真打ち登場。ステイグマ生き地獄。

だがその数ヵ月後、僕は実際に上がることが出来たのだった。

『ロン！』

ちなみに某札幌H高校とだけ言っておこう。

10章 不発弾

自分を爆弾に例えるのはどうかと思うが、一時期爆発しそうになったことは何度もある。何度もだ。一度や二度ではない。

「本当は自分に都合良く物事が進んでほしい。」

「本当は俺は連中とは違う。」

「本当は俺はこんなところで終わる人間じゃない。」

「本当は俺が1番。他はどうでもいい。」

「本当は連中を糾弾したい。」

「本当はこんなことバカみたいだ。」

「」

しかし、確かに連中と僕は違うだろう。どの人にも個性がある。僕にも、今まで会ったどんな人にも、それぞれの個性がある。しかし出発点は全て同じなのだ。全て同じ。大事なことで2回言いましたよ。

それはどうでもいいのだが、誰しも自分を正当化したいし、自分が一番に決まっている。しかし、誰もが自分が一番、好き勝手やっていったら、家庭、そして学校、そして国へと、崩壊していつてしまいうに違いない。

どこか譲歩したり、譲歩されたり、そうして物事がうまく行っているのだと思う。

昔―小学校高学年頃はずっと家にいて、ゲームばかりやっていたあの種の“廃人”だった。それは何故か。多分当時の僕には全てが敵だったのだろう。四面楚歌。実際にそうだったこともある。味方は無い。窮地におかれ、常に孤独だったように思う。

自分だけが100%正しいとは思わない。僕にも間違いはあったのかもしれない、いや、あったと思う。間違いがあったから失敗もし

た、間違いが無ければこんなものは書かなかったと思う。

しかし、中学校になってから、突然外出するようになった。昔は絶対無理だと思っていたが、今では自転車さえあれば札幌市内を闊歩できると思っている。自転車に限ったことではない。しかし、超ウルトラスーパーミラクルサンダートルネードファイナルインドア派だった僕が、超ウルトラスーパーミラクルサンダートルネードファイナルアウトドア派になった。それにはいろいろと理由もあるだろう。一つは家にいづらくなったということだろう。小学校卒業直前に両親が離婚した。家では両親が喧嘩していた、学校での鬱憤をゲームで晴らそうとしても、喧嘩している声が部屋にまで聞こえる。だからゲームでは憂さ晴らしができなくなった、という点。

そして、ゲーム、パソコンばかりで良いのだろうか、パソコンでは重大な過ちを犯した、常に何をやっていてもまわりは敵ばかり、四面楚歌だった。だから電腦世界にのめり込んでいつてよいのだろうか、そう思うようになったのも事実だ。しかし実際は、それでもいいと自分は思う。リアルでも、こういった電腦世界の中でも、均衡が取れていれば、僕はいいと思う。いや、それがベターだと思う。昔は良くないと思っていたも、最近ではいいと思うようになったこともたくさんある。昔は本当に運動が苦手で苦手なかつたものだから、運動会が近づこうものならどうにかしてチャラにしたいと思っていたものだった。

しかし最近では、バレーボールや水泳やサイクリング、スキーなんかは“大好き”という部類に入る。そういうものなのだろう。昔は嫌で嫌で仕方なかったにしても、時が経てば、良くなるもの、好きになっているものなのかもしれない。

苦手がたくさんあるということは、それら全てが得意かもしれないと僕は思う。

あとがき そして、Departure

こんなものを書いてしまった。この文章は単なる愚痴が延々と続く文章だ。そして僕の失敗談も綴った。こんなものを書いてしまい、僕は後悔している。しかし、数年前までの僕なら、こんなものを書こうと思わなかっただろう。プライドが高すぎた、自尊心が許さなかったと思う。しかし最近になって、アイデンティティについて考えるようになり、さらに『ダメ人間』『ダメダメ人間』を読んだというのも影響しているだろうが、少し自分を振り返ってみたいと思った。だからこんなクソ私小説、愚痴小説を書いたのだった。

2010年6月、僕はなんとなくブログで「私小説を書こうと考えている」と書いてしまった。口から、いやキーボードからでまかせを言った、いや書いたのだった。「無理無理無理無理。」でも、言ったことはやらなくてはいけない、という信念があった。嫌だとは思いつつもだんだんキーボードを叩いているうちに、バカみたいになってきたのだが、しかし、それが原動力に、エネルギーになったように「もう二度とこんな失敗はしない」だとか「バカだな、俺」と思えてくる。ガソリンには軽油、レギュラー、ハイオクと3種類ある。ハイオクのほうが値段も高いし、オクタン価が高いためノッキング（＝高負荷運転時にシリンダーをハンマーで叩くような音を発する現象）が起こりにくくなる。僕にとって、そうやって思ったことは上質な燃料、ハイオクガソリンのようなものだったのだろう。

僕はいろいろな失敗をしてきたが、この私小説に書いたことはほんの一部に過ぎない。だが書けることだけを書き、とりわけ今でもそのことを思い出し、燃料として活用できているものを書き出したに過ぎない。

多分、他の人が読んでも、「ああ、俺もこんなことやらかしたな…」「ホントにバカみたいだ」「こいつアホや」と思う人がいるかもし

れない。でも、その人たちもその失敗を燃料にし、原動力にし、今まで努力していろいろやってきてこんなクソ私小説を読んでもくれたのだと思う。わざわざ時間を割いてまで読んでほしい物ではない。はつきり言って自己満足、僕はずっと自己満足ばかりだったように思う。自己満足 自己嫌悪 後悔 自己中 …書き出せばいろいろある。ネガティブなことばかり書き出したが、明るくポジティブなこともあるだろう。しかし、ネガティブで捻くれた性格の僕はネガティブなことしか思い浮かばない。

例えば考えることとしよう。真っ白なYシャツが一枚あったとする。新品なのだろう。そのYシャツに一つだけシミがあったらどうだろう。大きさを言えば本当に小さい、タバコの底面積ぐらいだろう。でも人は普通、そのシミの部分ばかり目が行く。タバコの底面積ぐらいの小さなシミだ。確かに他の部分と少しでも違うところがあれば、その部分ばかり目が行くのは当たり前だろう。目立つからだ。しかし、逆に考えることもできるだろう。シミがあるのはその小さな部分だけ、他は白い。そして、洗濯すれば綺麗になるだろう。だから、そういう目立つネガティブな部分ばかり目が行くのは仕方がないことだが、目が行っている中でもそうやって普通なところ、ポジティブなところがあると考えてみるのもいいかもしれない。

僕が読んだ『ダメダメ人間』（鈴井貴之著）の終盤にはこうあった。『“ダメ人間”であることは、まだまだ頑張れるということであると、僕は信じる。』

僕もダメ人間だろうから、いや、ダメ人間だから僕もまだまだ頑張れるだろう。いや、頑張らなくてはいけないと思う。のびしろがまだまだあるだろうから、最大限まで伸ばせれるように努力する必要がある。

僕が好きな曲で、また登場するのだが、『Human Nature』という曲があり、その曲のサビでは

『If they say why? Why? (人は“おやおや”
”と言うだろうか) Tell'em that is huma

n nature. (それが人間ってものさ)』

『それが人間ってものさ』

『それが人間』

もともと『Human Nature』というワードには『人間性』と言う意味がある。僕が思うに、『人は“おやおや”と言うだろうか。それが人間ってものさ。』というのは、『たくさんの人がいて、それぞれの個性があって、まったく同じ人はいないんだ。それが人間なんだ。』と、マイケルは伝えたいのだと思う。『みんな違ってみんな良い』ということなのだろうと思う。確かにそうだ。個性はいろいろある。穏やかな人、いつもニコニコしてる人、すぐキレる人：他にもいろいろあると思う。だが、そうやって個性があるのが人間なのだろう。僕は最近この曲ばかり聞く。メロディにも歌詞にも惹きつけられる所があるからだ。僕の個性もあるし、この小説に登場した共犯のN村やいじめっ子Y田、誰にでも個性はある。みんな違ってみんな良い。まあ流石に他人に迷惑をかける個性はいいかなものかと思うが、それぞれ個性があり、持ち味がある。シミだらけのYシャツの人も、小さなシミが1つだけあるYシャツの人も、まったくシミのない新品の真っ白なYシャツの人だっていることだろう。

最後に、“ダメ人間”であるということは、まだまだ頑張れるということであると、僕も信じる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0881u/>

CHICKEN

2011年6月22日08時47分発行